

IGC 特集号に寄せて

地質調査所長 小川克郎

1992(平成4)年8月24日から9月3日まで、予想を超えて90に及ぶ国々から4,000人以上の参加者をえて、京都市の国立京都国際会館で第29回万国地質学会議(IGC: International Geological Congress)が開催されたことは本誌の読者諸氏はすでにご存知のことであろう。ところで、この記念すべき会議を振り返りその活動を記録に留めることは意義のあることだと思われる。会議から半年が経過して、多忙を極めた関係者もまず一息ついたところで、本IGC特集号を企画させていただいた次第である。幸い、会議を推進し成功に導いた多くの担当者のご協力をえて、ここにIGC特集号を皆様方のお手元にお届けする運びとなった。大変お忙しい中で原稿を執筆させていただいた方々に心より感謝致したい。

名誉総裁の皇太子殿下の開会宣言に始まった会議は大変活気に満ちたものであったように思う。筆者はこれまで何度も国際会議に参加したことがあるが、この会議にはこれまでにない独特の熱気のようなものが感じられて不思議な感銘を受けた。会議の様様については本号でも詳細に報告されているので、ここでは地質調査所の会議への係わりについて若干述べておくこととしたい。

地質調査所はワシントンIGC大会直前の1989年6月、会議の事務局を庁舎内に置くことを決定した。正直言って、この決定に至るまでには多くの曲折があった。政府機関である当所の性格上、学会への公的な支援に限界があったからである。また同じ理由で、予想される膨大な事務局業務をこなす人材の提供に困難があると予想された。このような困難

があったものの、「国際貢献のいい機会ではないか、この国際会議をぜひ成功させたい」、「その事務局を担当するのは自分達しかいない」という熱意だけでもかく事務局を発足させた。事務局発足後、事務総長に石原所長、事務局長に本座部長が就任するとともに数名の所員が事務局員に就任し活動が始まった。活動の輪は会議が迫るに連れて急速に広がって行った。ここで一々名前をあげることはできないが、こうした多くの所員の長期にわたるボランティアによって事務局は支えられたことを記しておきたい。

こうした地質調査所の熱意は工業技術院にも伝わり、先に述べたような政府機関としての様々な制約を超えて会議への協力の輪が通産省の中にも次第に広がって行った。その最後の結果が渡部恒三通産大臣の開会式での祝辞であった。渡部大臣をはじめとする工業技術院、通産省当局のひとつかたならぬご支援にこの紙面をかりて改めて心より感謝を致したい。

第29回万国地質学会議の成功は日本が世界に対して積極的に貢献して行かねばならない時代の幕開けにふさわしいイベントであったと思う。こうした認識が多くの地質関係者とそれに関連する方々にあったからこそ世界の参加者から高い評価を得ることが出来たのであろう。このようなイベントの一翼を担うことが出来た当所の研究者にとっても、これは大変貴重な経験であったと信じている。京都で知り合うことが出来た新しい仲間との交流の輪が新たな研究の世界を拓くことを願って本特集号の巻頭言を終わらせていただく。